

キャラクター紹介



蜜璃

文字の色



水を操る鬼

文字の色



『ふう……』

温泉に入り、日々の
疲れを癒す蜜璃。

久しぶりに長風呂を
堪能していた。

『随分長く浸かっちゃった……
そろそろ上がるうかしら』



温泉から出ようとした蜜璃。
だが—身体が動かない。

「…!?あれ…?」

「何これ…?」

身体が動かないと

言うより、足が動かさないと

温泉の湯が、まるでゼリーの

ように固まっていたのだ。

「これは…!?」

「一体…!?」

「悪いなお嬢ちゃん」

『……!?!』

声のした方向を蜜璃が見ると、そこには笑みを浮かべた鬼がいた。

『ククク……なかなか

イイ女だ……久しぶりの

当たりだな』

温泉に夢中になって

いたとはいえ、鬼に

ここまで接近されるまで

全く気付かなかった蜜璃。

足が思うように動かさない

こともあり、動揺を隠せない。

『鬼殺隊が来たたら面倒だ…』

『さっさとやっちまおうぜ?』

『なっ…!?』

突如温泉の水が蜜璃に向かって襲いかかる。どうやら水を自在に操れるのがこの鬼の能力のようだ。

足がすでに動かさなかつた

蜜璃は、あつという間に

水に拘束された。

『くっ…!』

嫌ッ…!』

『もがっ!?!』

すぐさま水によって口も押さえられた。
助けを呼べないようになるためだろう。

裸で拘束された。

武器もない。

助けも呼べない。

この時点で蜜璃はもう

詰んでいた。

『んっ……!』

『んんっ……!』

くっ……この水の拘束……

外せない……！全然……

ビクともしない……！

常人ならざる
力を持つ蜜璃だったが、
それでもこの拘束は
全く破れない。

『ムダムダ。オレの水の拘束は

鬼が束になっても破れない。

お嬢ちゃんみたいな華奢な

身体の女にやどうすることも

できねえさ』

『さて……鬼殺隊は

怖い……今のところ

周りに人の気配は

ねえな……それじゃ……』

『ちよつとオレと楽しもうぜ？お嬢ちゃん』

『!!!』

突然、水の塊が
蜜璃の胸に
触れてきた。

そのまま
乳首を重点的に
水がウネウネと
動き出す。



『んっ！んっ…!!』

(な、何…!!)

この鬼…一体何を…!!)

鬼殺隊の柱として、
いつでも死ぬ覚悟は
していた蜜璃だが、
この鬼は違った。

自分を食おうと
しない。いや、
ある意味食おうと
しているのかも
しれないが…

『おっ?良い反応
するじゃないの』

今までこんなことをする
鬼には出会ったことがない。
完全に蜜璃を性の対象として
見ている。

今まで経験したことのない状況。
当然こんなことに耐性の無い
蜜璃はビクビクと身体を
震わせることしか出来なかった。

くっ……この鬼……何がしたいの……!!
私は……どうすれば……ツ!!!

水は更に細くなり、今度は
蜜璃の乳首の先端をクリクリと
弄りだす。

『んんっ!んんっ……!!』

ソレに対し蜜璃は更に
身体をビクつかせ反応する。

『はははっ!面白れえな
お嬢ちゃん。欲求不満なのか?』

くっ……この鬼……！勝手なことを……

蜜璃を煽った後、次に鬼は
直接蜜璃の乳首を舐め出す。

んっ……！
んっ……！

『ククッ……やはり良い反応をする……
このままじっくりこの身体を
堪能するのも悪くはないが……』

『コイツを使ったら
どうなるのかも
気になってきたなあ……』

『……!?』

嫌な予感しかしない。
：鬼はその液体を、
先程まで舐めていた
蜜璃の右乳首に
近付ける。

そう言って鬼は
自身の指先から謎の
液体を絞りだした。

身の危険を感じ、
身を振よる蜜璃
だったが、無駄。
水の拘束は微動だに
しない。

そのまま鬼の指先の液体が
蜜璃の右乳首に滴る。

ビクンッ

「ん!?

んんっ!?!?!」

突然の衝撃に蜜璃の
身体全体がビクンビクン
跳ねあがる。

『はははっ!いいねエ!

予想以上の反応だ!』

『今お嬢ちゃんにかけたのは感度を上げる
特別な水さ……ただ、人間には効きすぎるとかも
しれんがな……ククッ』

そう言っって鬼は再び
蜜璃の右乳首に
しゃぶりつく。

『んんんっ!!!
んんんんっ!!!』
(何コレ……!? さっきと……
全然……! 違ッ……)

水をかけられる前と
明らかに感じ方が違う。
右胸から迫りくる
圧倒的な快感に
蜜璃は動揺していた。

そして、その時は突然襲い来る――

『んんんんんんんんっ!!!』

ビクッ

ビクッ

ビクンッ

急激に感度の上があった
蜜璃の身体は、鬼の攻めに
耐えきれず、胸だけで
イカされてしまった。



『ふうー…ククツ…』

胸だけでイっただな…

お嬢ちゃん』

イカされたことで
脱力する蜜璃。水の塊が
蠢き、体勢を
変えさせられる。

『お嬢ちゃんにかけた液体な…』

感じやすくなるのは右胸だけじゃねえぜ？

かけた箇所から効果は全身に広がっていく…

今からそれを証明してやるよ』

鬼がそう言うのと、水の塊が触手のように複数動き出し、蜜璃の足裏を攻め始めた。

「んっ！んっ！

…んんっ！！」

普段ならくすぐったいと

思うこの水の動きも、今の

蜜璃にはとてつもない快感と

なっていた。

（そんな…足の裏を水で

ウネウネされてるだけなのに…

こんな…こんなことって…！）

足の裏でイクなんてあり得ないー

そんな蜜璃の思いとは裏腹に、

性的な快感はどんどん押し寄せて

くる…。

水で拘束され、宙に浮いているせいで地面に

身体が密着しておらず、踏ん張れない。当然

そんな状態で迫りくる快感に耐えることなど

出来るはずもなく、すぐに二度目の絶頂が

蜜璃に訪れるー

『んぐぐぐっ!!んんんっ!!』

ビクッ ビクッ
ビクンッ ビクンッ

蜜璃はイった。
イかされた。

足の裏だけで。

胸だけならまだしも、足の裏だけで
成すすべなくイかされてしまったのだ。

『ふうーっ……
ふうーっ……』

屈辱。
圧倒的屈辱。

『……どうだろ？足裏だけで
イけただろ？すげーだろ
オレの能力……はははっ！』

この鬼が十二鬼月なのかは不明だが、
全裸で拘束され、胸だけでイカされた後、
足裏だけでイカされた。蜜璃の頭の中は
屈辱感で埋め尽くされていた。



『それじゃあそろそろ...』

ま〇〇こ行ってみるか...!』

己を恥じる余裕すら
蜜璃には与えられない。

『!!!』

水の触手が
蜜璃の秘部を
攻め始めた。

『んんっ…
んんんっ…!』

『ククッ…エロい音奏でてんなあ…
そのヌルヌルは湯の水なのか
ま〇こ汁なのか、どっちかな…?』

すでに2度絶頂に至っている
蜜璃。それも胸と足裏だけで。
そんな蜜璃がヴァギナや
クリトリスの刺激に
耐えられるはずもなく…

『んんんんんっ…!』

（嫌ッ…来る…!また!）



『リンリンリンリンリンッ!!!』

ビクッ ビクビクッ

ビクンッ

水の触手が膣を攻め始めて数秒。蜜璃はあっさりとして3度目の絶頂を迎えた。

『おろ？ ははっ！ なんつーエロま○こだ！』

これまでに色んな女で遊んできたが…

こんなに早くイった女は初めて見たゾ？』

『もしかかしてお嬢ちゃん……
誰かに襲われるのを
待ってたのか？ククッ
だとしたら悪いな……
人間の男じゃなくてヨ』

必死に否定
したかったが
蜜璃の口は
塞がれており
声を出せない。

（違う……！
違う……
私は……！）

そもそも仮に
口を塞がれて
なくとも……
短時間で3度も
イカされている
蜜璃が何を
言おうと説得力の
カケラも無いわけだが。

『お詫びと言っちゃあなんだが…
こういうのはどうだ？お嬢ちゃん
みたいな変態が好きそうな体勢だ』

『……………!!!』

温泉の水面に寝かされ、そのまま
上半身だけ湯に沈められた蜜璃。
そのまま再び秘部を弄り回される。

（ま、まずい…
このままじゃ
呼吸が…ッ）

これでは一切呼吸が出来ない。命の危機を感じた蜜璃はこれまで以上の、全身全霊の力を身体に込め拘束を外そうとする。が――

その間も蜜璃の下半身からはグチュグチュと大きな、下品な音が奏でられていた。

やはり全くビクともしない。……どころかビクつくのは蜜璃自身。

それは微かだが水中にまで届き、蜜璃の羞恥心を増幅させた。

（ダメッ！）

もう……ダメー！

ビクッ
ビクッ

ビクッ

ビクビクッ

『はっ！まあたすぐイったな
お嬢ちゃん…そんなに気持ち
良かったかよ？その体勢は！』

再びすぐにイった蜜璃。しばらくの痙攣の後、
蜜璃の激しい鼻息で水面はブクブクと泡立った。

『このまま水で弄り倒しても

すぐイっちゃうしつまんねえな

…そろそろ挿入といこうか…!』

そう言って鬼は自身の
のブツを曝け出し、
蜜璃をその上まで
持ってきた。

『…!!!』

このままでは犯される。

だが、さっきまでまともに呼吸が

出来なかつた蜜璃は頭がボーッと

何が起きていのかいまいち把握でき

おらず、その表情に焦りは見られなかつた。

そして、鬼の
下半身と
蜜璃の
下半身が
一つになる――

ズブツ!!!

『んんっ!?
んんんっ!?』

入った。侵入してきた。
鬼の肉棒が。蜜璃の膣内に。
そこで初めて蜜璃は気付く。

自分が鬼に犯されている
ということに。

『んんっ!!
んんんっ!!!』

『ん?なんだ
お嬢ちゃん...
処女だったのか』

『なるほど……大方、非処女に
なりたくて襲われるのを
待ってたって感じか？』

『んっ!!』

鬼の予想は的を外れも
いいところだったけど、
鬼の肉棒で突かれる度に
ビクビクと身体を震わせ
感じまくっている蜜璃。

『んっ!!』

すでに心の中ですら、
鬼の言葉を否定する
ことが出来なかった。

『それにしても処女の
くせにここまで感じる
たあ……お嬢ちゃんは
やっぱ最高に変態だな？』

『オレの予想通り、非処女になりたくて襲われるのを待ってたんだな…』
『変わったお嬢ちゃんだ。感謝しろよ?』

『ンッ』

『ンッ』

（もうダメッ！

またイク！

イっっちゃう…!!）

『ンッ』

ブルンブルンと上下する胸。
愛液が溢れ出る膣。
蜜璃が5度目の絶頂を
今すぐにも迎えそうなことは
誰が見ても明らかだった。

『ンッ』

『ンンンン
ンンンンッ!!!』

ビクンッ
ビクンッ
訪れた。

ビクンッ
ビクンッ

初めて挿入された肉の塊に
よって、蜜璃に5度目の絶頂が

処女を奪われた
シヨックと、立て続けの
絶頂で蜜璃の意識は
朦朧としていた。

それに気付いた
鬼は蜜璃の
上半身を水の
塊に突っ込ませる。

『ボゴッ……ッ！
ンゴゴ……ッ』

『おつと危ねえ……すぐにイク変態とは
言え……気絶しちや反応しなくなっ
てもつとつまんねえことになるからな』

『つってもま、水中じゃ
呼吸できねえから
どのみち気絶すんのは
時間の問題か……
丁度良い体勢してるし、
ここいらで出しちまおう』

鬼が狙ってやったわけ
ではないが、今の蜜璃は
尻を突き出して
挿入するには丁度いい
体勢だった。

ズパンッ

『ンゴゴッ!!
ゴボオッ!!』

再び鬼の
挿入が始まる。

すぐに自分が
再び肉棒で突かれて
いることを悟った。

『ゴゴブッ

ゴボッ!!!』

水に埋もれていた
蜜璃には見えて
いなかったが、先程
まで自分の膣内に
入っていたモノと
同じ感覚。

『フラッ』『フラッ』『フラッ』

だが、先程とは肉棒の突くスピードが違う。より激しいものになっていた。

パンッ

パンッ

パンッ

パンッ

それもそのはず。鬼は蜜璃がギリギリで意識を保っている

ことを察し、ここで一気に射精まで至ろうと決めていたのだ。

薄れゆく意識の中、鬼の動きに恐怖を覚える蜜璃。

（まさか…嫌ッ！）

まさか

これって…ッ！）

中出しされる。鬼の種子を植えつけられる。孕むのかは定かではないがさせるわけにはいかない。…が、鬼のソレを止める手立ては蜜璃には無い。

パンッ

止める手立ては無くとも

無情にも不安、恐怖は迫ってくる。

だが身体は依然感じまくって

おり、中出しを意識し出すと

自然と膣に力が入る。

パンッ

パンッ

『なんだこのま〇こ！』

急に締ま…っ！いいねえ

お嬢ちゃん！中出しして

欲しいんだな!? うっ…

欲しかったんだな!』

『…！ おっっ？』

ははっ！』

（嫌！嫌ああアッー）

ドピュッ 『ンゴゴゴゴッ!!!』

ビュルルルッ

ビクビクンッ

『ンゴオッ!!!』

ビクッ
ビクッ

中出しされた瞬間、
朦朧としていた意識を
絶望が包み、蜜璃は
気絶した。

『…ふうー…ッどうだったよ

お嬢ちゃん？鬼の精液の味は？

…っでもう聞こえてねーか…

クハハッ！オレの方は

なかなか楽しめたぜ…特に

最後の締めは最高だった』

鬼は満足した表情を
浮かべ、湯から蜜璃を
上半身だけ水に
埋めたままの状態
引き上げた。

蜜璃は気絶しているが
その身体はまだ
鬼に犯された余韻で
痙攣している。

『犯し終えたら食うつもり
だったんだが…ふむ…
このお嬢ちゃんでもまだ
数回は楽しめそうだな…』

『よし、せっかくだし
このまま
連れて行くと
するか…ククツ…』

結局蜜璃は最後までこの鬼に
『柱』と、いや、鬼殺隊とすら
認識されないまま、どこかへ
連れ去られることになった…

END



※本編文字無し版











































































